被災地派遣レポート＜第４回＞

人事委員会事務局試験部試験課昇任主査　清水　良誠さん

■被災地へ

４月９日（土）、午後８時半に都庁舎に集合した私たちは、東日本大震災による被災地支援のため、宮城県へ向け、それぞれバスに分乗して一路東北地方へ向かった。宮城県南三陸町への派遣が５０名、宮城県石巻市への派遣が２０名とされ、総勢７０名の派遣隊である。

（津波による甚大な被害を受けた南三陸町）

我々は南三陸町の志津川中学校避難所支援を任務とした１０名の班であり、同じく避難所支援を任務とした別の現地派遣隊１０名と同じバスに乗車した。途中、サービスエリアで休憩や時間調整を行い、午前６時３０分頃に南三陸町へ到着。南三陸町は、津波による甚大な被害を受けた地域の一つであり、バスの車窓からも、手付かずのままとなっている瓦礫の山を確認することができた。

（志津川中学校へと通じる階段）

志津川中学校は、壊滅状態となった町の高台に位置し、震災当日は押し寄せる津波を背に、この中学校を目指して必死に避難した方が多数いたと聞く。バスが停車した場所からも、津波に飲み込まれた町の様子を一望することができ、広範囲に渡る被害の大きさをあらためて実感した。バスを降車後、第二陣として任務にあたっていた派遣隊と合流し、すぐに引継ぎを受けた。

■避難所の概要

（志津川中学校校舎）

志津川中学校の避難所では、自衛隊が校庭にテントを張って寝泊りしており、避難所への給水・炊き出し、町内の瓦礫除去などの任務にあたっている。また、救護チームも避難所で寝泊りしながら医療活動を行っている。都職員の現地派遣部隊は、救援物資の搬入・搬出、清掃、燃料の補給など、避難所全体の運営支援が役割である。志津川中学校は、地域コミュニティによって運営されているため、我々派遣隊は物資の管理を担当している方（この方も避難者の一人）からの指示により、任務にあたることとなる。また、電気・ガス・水道といったライフラインは依然として全てストップしていた。

主に使用されているのは３階建ての校舎であり、体育館は使用されていない。校舎１階の各教

室は、避難者の方々の居住スペースとなっており、２階には救護チームの診療スペースとして１室が割り当てられている。３階は、町役場職員、救護チーム、都職員派遣隊に各１室が割り当てられており、それぞれの部屋で寝泊りをする。

我々の活動拠点は、多目的ホールと呼ばれる広い一室で、ここに大量の救援物資がストックされている。毛布や水、カップラーメン、米、衣類、その他日用品が所狭しと積み上げられており、生活に必要なものは一通り揃っている。震災後２、３日は物資不足により苦労したとのことであったが、現時点では、自治体、企業、団体等からの支援物資が行き届いており、最低限の生活はできる状況にある。全国各地からの善意が避難者の方々の生活を支えている。

（校舎３階から見える風景）

■派遣隊の任務

避難所では電気がないため、暗くなったら就寝し、日の出とともに起床する。起床後は、朝の日課として避難者の方々とラジオ体操を行う。集まった避難者の方々と挨拶を交わし、一緒に体を動かした後、朝食を済ませて任務開始となる。

主な任務は救援物資の搬入・搬出である。救援物資がトラックで届けられると、我々職員が列になり、バケツリレー方式で物資を運んでいく。また、避難者の方の「薄手のジャンバーが欲しい」「Ｌサイズの肌着が欲しい」「２６サイズの靴が欲しい」などの要望応じて、該当の物資を探すことも多い。そのため、事前に物資を細かく分類しておくことが重要だ。ちょうど気候が冬から春に移り変わるタイミングであったため、教室前の廊下を使って春物衣類の配布会の開催も行った。その他、避難所の清掃や給水車からの水汲み、灯油の補給など、避難所の運営に関わること全般を、我々派遣隊が担当した。志津川中学校では、避難者の方々自身が中心となって避難所の運営業務を行っているため、我々が手足となって動くことで、少しでも皆さんの体が休まるよう心がけながら、任務を続けた。

避難所では毎日２回、朝７時半と夜６時半に、部屋長会議が開催される。避難所全体を統括する自治会長、避難者の居住する各教室ごとの代表者、役場職員、中学校の教員、自衛隊、救護チーム、そして我々東京都派遣隊の班長が集まり情報の共有化が図られる。町役場からは、運転免許証の再発行、ガソリン券の支給、集団避難の募集など、行政情報が毎日伝達される。いずれも避難者にとっては非常に重要な情報ばかりである。また、救護チームからは、他の避難所におけるノロウィルスや感染症の発生状況が伝達される。志津川中学校の避難所では、避難者の方々の努力により衛生状況が良好に保たれているため、幸いなことにノロウイルス等の発生などはない。しかし、水道・電気・ガスなどのライフラインが止まっている状況下では、常に衛生状況に気を配る必要がある。アルコール消毒や清掃、トイレの後の手洗いの徹底が、厳しく呼びかけられた。我々現地派遣隊も、マスクの着用や、寝泊り

（避難所のドアに貼られた貼紙）

する教室へ入室する際のアルコール消毒をルール化するなどし、感染症予防に万全を期すこととした。

■被災者の笑顔と涙

我々現地派遣隊は、同じ場所に寝泊りする仲間として、避難者の方々に好意的に接していただいた。我々も、言動や態度に十分な注意を払いながらも、積極的に挨拶やコミュニケーションを取るようにし、避難者の方々と親交を深めることとした。避難所では、高齢者の方から子供たちまで一様に明るく生活しており、深い悲しみと厳しい生活環境に直面しているものの、精一杯の笑顔で我々に対応してくださり、恐縮した。

４月１１日、震災から１ヶ月を迎えるにあたり黙とうが行われた。２時４６分、小雨が降る中、町長からのメッセージが代表者によって代読された後、黙とうの呼び声とともに全員が目を閉じ、避難所は静寂に包まれた。我々現地派遣隊も全員整列し、亡くなられた方々のご冥福と、行方不明者の一日も早い発見、被災地の復興を祈った。これまで笑顔を見せながら生活していた避難者の方々であったが、多くの方が目に涙を浮かべ、手を合わせていた。１ヶ月前に起こった震災が、多くの方々の心の奥底に深い傷を負わせたことを痛感するとともに、今回の任務の責任の重さを再認識させられた瞬間であった。

■現地派遣隊の任務を終えて

４月１４日早朝、第四陣が志津川中学校に到着し、業務が引継がれたことで、我々の任務は終了した。新旧班長・サブの４名で避難所内を挨拶に回り、我々第三陣の帰京を伝えると、多くの方から感謝の言葉をいただくことができ、わずか５日間の任務であったが、被災地復興に向けた支援を達成することができと実感した。

宮城第三陣・１班の班員達は、被災者の方々との距離が非常に近く、２４時間常に緊張を保たなければならない避難所運営支援業務を、高い士気と相互の協力で立派に遂行してくれた。また、全員が病気や怪我をすることなく、心身両面とも健康な状態で帰京することができたのは、各班員の自己管理に対する努力と高い規律の賜物である。少しでも被災地のために役に立ちたいとの班員の願いは、任務に対する真摯な姿勢となって現れていた。私自身も、その姿勢に支えられて任務を遂行することができた。９名の班員の皆様ありがとうございました。

最後に、側面支援をしてくださった総務局の関係部署の皆様、被災地現地事務所の皆様、南三陸町役場の皆様にこの場を借りて感謝の意を表するとともに、被災地の復興を祈念して、宮城第三陣１班の活動記録とさせていただく。